

## 福井先生との翻訳の仕事

菊地敦子

福井先生と一緒に翻訳の仕事をしてから7年あまりになる。週に1回、総合研究棟6階の私の研究室で会って4時間くらい作業をする。授業がない時はもう少し頻繁に会う。気分転換に梅田の喫茶店で作業することもある。私の研究室で作業する時は福井先生が必ずデパートでおいしいお弁当を買ってきてくれる。お弁当を食べながら、まずはその週にあったできごとについておしゃべりをする。大学で起きたこと、うちで起きたことについて話す中で、学問に対する、あるいは人生に対するお互いのスタンスを確かめ合う。長年一緒に翻訳をしてこられたのは、こうしたおしゃべりを通して福井先生の経験を知り、先生の価値観を学び、先生に対する尊敬の念を抱くようになったからである。

『外国語学部紀要』に翻訳を載せるたびに書いているが、福井先生と一緒に翻訳しているのはルース・ベネディクトのアンソロジーともいべき *Anthropologist at Work: Writings of Ruth Benedict* 『文化人類学者の仕事』(仮題) である。この本はベネディクトが1948年に死亡して10年後に彼女とさまざまな意味で関係があったマーガレット・ミードによってまとめられたものである。ベネディクトが書いた論文だけでなく、日記、詩、そして彼女に宛てられた、あるいは彼女が書いた書簡も含まれている。全体で600ページ近くある膨大な本である。幸い論文、日記、手紙などいくつかの部分に分かれているので、授業の合間をぬって翻訳することができる。現在のところ、440ページまで訳し終わった。あとは論文を4本訳せば終わる。翻訳書の出版社はすでに決まっている。ミネルヴァ書店である。ミネルヴァの堀川編集長とは福井先生が時々会って進捗状況を知らせている。来年には仕上げる予定だ。

翻訳作業の工程はこうである。英文を読みながら、大体の意味を日本語で福井先生に伝える。福井先生も英文をチェックしながら、訳し忘れた箇所はないか、別な意味に取れないか確かめながら作業する。前後との関係をつかみ、原文が意図していることを二人で話し合う。次に、もう少し正確で自然な日本語にする。なかなかいい訳が浮かばない時は辞書を見て、適切な表現を選ぶ。福井先生はそれを書きとりながら、日本語を調整する。途中で専門用語、特殊なイディオムが出てくるとインターネットで調べる。固有名詞が出てくると、その人物はだれなのか、その組織は何なのかを調べる。福井先生がその背景を知っていることも多い。私は英文を読みながら頭に浮かぶ日本語訳を忘れないうちに次々に口に出す。それを必死に福井先生がノートに書きとる。長文でも私は容赦なく喋り続ける。途中で止めたなら考えの糸口を失ってしまうと知っていて福井先生は私を止めない。文を訳し終わって頭を上げると、先生はまだ必死で

ペンを走らせている。「…の後は何て言った？」そこでやっと私に聞く。福井先生がペンを走らせるスピードは並大抵のものではない。しかも、乱れた字ではなく、後からでもちゃんと読める。その上、私が訳した内容を確認しながら書いている。神業である。お互いかなりの集中力を用いる作業なので、途中で何度か息抜きを入れる。訳し終わった箇所について話し合うことが多い。訳し終わった部分を今度は福井先生が家でコンピューターに打ち込む。打ち込みながらさらに日本語の調整をする。次の週に会うと前回翻訳した箇所で先生が書き直したところ、わかりにくかったところなどについて話し合う。そしてまた次の箇所を訳す作業に入る。これの繰り返しである。2013年の『外国語学部紀要』第9号からほぼ毎号で翻訳した部分にコメントをつけて掲載している。その校正の際にさらに翻訳内容に修正を入れ、訳を磨いている。

1959年に出版された *Anthropologist at Work* をなぜ今さら翻訳しているのか疑問に思う人も多いかもしれない。文化人類学の分野はその後発展を遂げているし、1959年から世の中は大きく変わっているのだから、1930年代から1940年代にベネディクトが書いたことなど現代社会にはあまり意味を持たないのではないかと思う人もいるだろう。もしそうだったら、私もこの翻訳作業に加わらなかったと思う。また、この本がベネディクト研究者にのみ重要な資料であるとしたら、これまでベネディクトとは関わりを持ったことがない私がこの翻訳をすることにはならなかったと思う。なぜ今この本を訳しているのか。それは、この本に書かれたことが今の社会に通じるところがあるからである。そして、ベネディクトが生きた社会の中でベネディクト、あるいは彼女の師であるフランツ・ポアズが学者として貫いた姿勢を心から尊敬し、私もこの本を訳すことによって彼らと同じように今の社会に一石投じたいと思うからである。これは、私と福井先生の共通の思いだ。

ベネディクトが生きた第二次世界大戦前後のアメリカ社会は、黒人、ユダヤ人、女性に対する偏見ばかりでなく、少数民族、敵国民、性的マイノリティーに対する偏見が充満している社会だった。そのような偏見に対してベネディクトは感情に流されることなく、あくまでもアカデミックな手法で、偏見は社会が作り出すもので、一つのグループの人間が別のグループの人間に勝るとは言えないことを淡々と論じている。それは、ベネディクトのネイティヴ・アメリカンの研究においても、日本研究においても、一貫して保っている姿勢である。そして、ベネディクトは自分の考えを証明するための努力を惜しまなかった。戦争の足音が刻々と近づいている中、ポアズは懸命にユダヤ人への差別の無意味さを説き、ベネディクトは戦争を引き起こす社会の構造を分析した。彼らの努力もむなしく、アメリカが戦争に突入した時の落胆は大きかったに違いない。戦争が終わりに近づくと、ベネディクトはアメリカ政府を説得するためによりいっそう科学的な手法で日本人の行動パターンを分析し、それを悪と決めつけられない理由を明確にした。当時のアメリカ政府がベネディクトやポアズのような研究者に耳を傾け、彼らの意見を少なからず尊重したことは、歴史において幸いなことだと言える。

ベネディクトが自分の考えを切々と訴える論文、ベネディクトと時代を共にした当時の知識

人の書簡を翻訳する中で、私と福井先生は当時の状況と現在の社会情勢、そして我々学者の役割についてよく話しをする。世界は今ISISに怯えている。その恐怖を取り除くために外国人を占め出し、自分たちの価値観だけを守ろうとしている。そして、メキシコからの移民、イスラム教徒に対して度々暴言を放ったトランプ氏が先日次期アメリカ大統領に決まった。自分たちとは違う人たちのことを理解しようとする姿勢がどんどん失われつつある。そうした社会を変えるには、私たち研究者がベネディクトやボアズがしたように、こつこつと客観的な事実を集め、どのようにして今の社会状況が生まれたのかを説き、科学的方法で人間を分析し、それに基づいて正しい判断をするように世界の人を説得するしかないのではないかと思う。それが私たち学者の使命なのではないだろうか。その足掛かりとなるのが、今福井先生とやっている翻訳の仕事だと私は考えている。

翻訳の作業を二人でするとするのは、よほど二人の息が合っていないとできない作業である。日本語に訳す時、日本語の表現に対する二人の感覚が合っていないとなかなか前に進めない。しかし、それよりもっと大事なものは、何のために訳すのかという基本的な姿勢の同意なのではないかと私は思う。私が福井先生と一緒に長年翻訳の仕事をしてきて、今でも作業をしていて楽しい理由は、この本は絶対に訳さなければならないという使命感を共にしているからだ。私は、この翻訳を通してたくさんのお話を福井先生から学んだ。日本語の表現力を磨くことができたことは私にとって大きな利益だ。今まで曖昧にしか理解していなかった表現の正しい使い方を学び、新しい単語も多く学んだ。そして、何よりも、学者としての福井先生のスタンスを学んだ。それは、ベネディクトの生き方と共通するものがある。どこまでも自分が信じることを貫くスタンスだ。関西大学に入って、福井先生と出会い、この仕事を一緒にできることを非常に光栄に思う。